

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

同志社女子部創立百周年
記念誌編集委員会編

『同志社女子部の百年』

(同志社女子部創立百周年記念誌)
編集委員会、B5判、一九九頁

昨一九七七年は、「同志社女学校」が開校されてから百周年に当たる記念の年でありました。同志社女子中学・高等学校では、百周年記念事業の一つとして、記念誌の刊行を企図され、七七年四月に編集委員会を発足せしめ、同十二月には、標記のりっぱな記念誌を刊行されました。編集後記によ

りますと、「百年史」でなく「記念誌」としてと、説明がありますが、いままではどまどまった同志社女子教育関係の資料集はなかっただけに、同志社の女子教育史に関心をもつ者にとっては、まことに貴重この上ない歴史的労作と感謝せずにおられません。百年の女子教育史を目のあたりに見るような記録写真一〇〇葉に加えて、女子部の沿革を示す年表や資料、さらに、百年の女子教育の推移を語る学校規則やカリキュラム等の資料(B)および現況を示す資料(C)に、旧教師や卒業生による「思い出」を含め、B5判、約二〇〇頁にわたる内容は、今後の女子教育史研究のためばかりでなく、第二世紀への新しい教育が、真に同志社立学の精神に根ざし、正しく教育の道統を継承するものであり得るための不可欠の指標として生かされねばならぬことを信じて疑いません。

とくに開校当初からのアメリカン・ボードと同志社当局との方針の間に見られる微妙な、また重要な意見の対立やそれが原因であると見られる明治十八年、同三十年の女子部存亡の危機は、編集委員も指摘され

るように、同志社のキリスト教主義教育の根本を歴史的に理解する上の、きわめて重要な問題と思われまじ、このたび、この問題を解くための貴重な資料が、「記念誌」によって公にされたことを心からうれしく思うものです。また国家主義と天皇中心主義によって蔽われていたわが国の教育状況のなかで、同志社の教育、なかんずく女子教育がいかにしてキリスト教主義の原理を貫きとおしたか?ことに昭和十年代に起こった数々の暗いできごとに学校当局や教学責任者はどのような苦闘を強いられたか?この記念誌はとくに意識的にこの時代の資料の探索・収集につとめられたようです。さらに、戦後の混乱と新学制への移行の時代もかなり綿密な年表づくりがなされていて興味深く、また年代を追って変化する同志社の地図、建物の配置図にも肌理こまやかな調査のあとがうかがわれておりがたく思われます。開校当初、アメリカから派遣されたスタークウェザー、パーミリー等女性宣教師の書簡や、ミス・デントン・ノート等の英文資料も初めてまとまって目にするのできた貴重な資料で、同志

社初期の女子教育の位置や性格の一端を知り得る興味深い資料であります。

仁井国雄元校長を中心に編集に当たられた先生がたの精力的かつ緻密なご努力と、武間富貴前同窓会長をはじめ女子部の発展に寄与された多くの先輩がたの援助が結果としてでき上がったこの記念誌は、今後に期待される女子教育史編纂の礎石としてますますその真価を発揮することと思います。(なお、希望者は女子中高事務室まで。実費一、八〇〇円、送料二〇〇円)

(酒井 康・女子大学教授)

樋口和彦著

『ユング心理学の世界』

(創元社、B6判)
二九二頁、一、五〇〇円

ユングの著作が、最近、ヨーロッパでもアメリカでもよく読まれるという。一時は過去の人とみなされていたユングがこのように復権してきたのは、彼の心理学がヨーロッパの精神の影の部分に目をすえ、その全体性の回復を目指すものであり、それが

今日の世界の状況に対して意味深いものであることが理解されてきたためであろう。わが国においても、ユングに対する関心がとみに高まりつつあるが、そのときに本書が発刊されたことは、まことに喜ばしいことである。

本書は著者もみずから述べているように、ユング心理学の世界への入門として書かれたものであるが、著者自身の体験を通じて読者がユングに触れることができる。すなわち、著者の人格が中介者としていきいきとはたらいっていることが実感できるものとして、極めてユニークな本となっている。その点、自らのユング心理学との出会いを述べた第一章の記述は、読者の心をとらえ、ユングの世界へと引き込んでゆくような迫力をもっている。

ここで本書の構成を紹介すると、前記の第一章に続いて、第二章ユング心理学の成立、第三章ユング心理学の基本概念、第四章ユング心理学と夢分析、第五章ユング心理学の展開、第六章ユング心理学研究法、となっている。第二章においては、ユングが「魂の医者」として生きぬいた、その生

涯と関連せしめながら、ユング心理学を成立せしめる基礎に存在するユングの内的体験と世界観が示される。第三章はユング心理学の基本概念が提示され、第四章は夢分析が論じられる。これらの章では分析家としての著者の豊富な体験が背景となっているだけに、ときに述べられる印象的な臨床例などによって、難解なユングの考えが極めてわかりやすく示されている。第五章は、ユング心理学の広さと深さを示すものとして、童話、錬金術、東洋思想、神話、宗教などについて語られる。しかし、これも単なる思弁ではなく、心理療法という極めて人間的な営為と関連づけながら、現代人の生き方と密接にかかわることとして取りあげられている。第六章は、ユング心理学を今後さらに研究してゆこうとする人に対する配慮のゆきとどいた手引きとして、大いに役立つものである。参考文献も丁寧にあげられている。

本書にも記されているとおり、筆者と本書の著者は、ちょうど同じころにアメリカにおいてユング心理学に接し、後にスイスのユング研究所で出会って知り合いとな

り、その後ともにユング心理学を学んできた間がらである。ただ、筆者は心理学を背景としているのに対して、著者は宗教学を入口としてユングに接した点が異なっている。本書においても、著者の宗教学としてのあり方が深くかわっていることが非常に印象的であった。最初にも明らかにしたように、著者の人間性がプロモーターとして作用していることとともに、それらが、本書を他に類のないユニークなものに仕立て上げていると感じられる。

(河合肇雄・京都大学教授)

大木久雄記

『現代フランス演劇 五人集』

(白川書院、A5判
三〇六頁、一、八〇〇円)

みずから詩人、演出家であり、かつてソルボンヌに学んだことのある訳者が、長年こつこつと訳してこられた「五〇年代の前衛と呼ばれている」フランス現代演劇の五人の作家の十の作品がこの度まとめられて

一本となった。さまざまな演劇論や、紹介記事などで名前だけは知っていても、そのもの自体を知ることのなかったわれわれにとって、まことにありがたい書物である。

収められているのは、ジャック・オーディエルディ『黒い祭』、ジャン・タルデュール『窓口』他五篇、フェルナンド・アラバール『自動車墓場』、ルネ・ド・オバルディア『ペビー・シッター』、ジャック・ボレル『おばさん』であり、巻末には訳者による詳しい解説が付されている。この五人の作家のうち、後者の二人は、筆者もその存在を本書によって初めて教えられた。

今ここでそのすべてについてふれることのできないのは残念であるが、筆者が特に興味をもったのはやはり、タルデュールとアラバールであった。第二次大戦後の現代演劇の二大潮流をなすブレイク以下の新しいリアリズム劇とイヨネスコ、ベケットなどのいわゆる不条理劇のなかで、この二人はフランス不条理劇の第二世代ということができよう。同世代のドイツ不条理劇作家のなかにギュンター・グラス、ヴォルフガンク・ヒルデスハイマー、パウエル・ベルトナ

ーなどがいて、かつて筆者もその辺りの作品に興味をもったことがあるのだが、今回大木氏の訳業を通じその共通性に大いに驚いたしだいである。『不条理の演劇』のなかでマーティン・エスリンは『窓口』をカフカの『鍵穴』にはジュネの響きがあるとしているが、私はむしろ右にあげたドイツの作家たちを思い起こしていた。『ことばの時間』のもつ高級な形而上劇としての魅力は、最近ほとんど忘れかけているものであった。だが筆者がもつとも興味をもったのは、既に『戦場のピクニック』などでわが国にも知られているアラバールの『自動車墓場』であった。これは明らかにグロテスクな現代におけるキリスト受難劇のパロディであり、前記のエスリンも、主人公の「エマヌールとキリストとの類似は、不敬に近いほど明白である」と書いている。エマヌールは家畜小屋に生まれ、その父は大工で、三十歳になったとき「金のない連中の為、夜、ダンスを楽しめるよう、ラッパを吹きに行く」ために家を出る。官憲にかれを売る仲間のクラリネット吹きトベは、まさにユダそのものであり、幕切れ警官の

自転車にくくりつけられたその姿は十字架にかけられたキリストを思い出させずにはおかない。「首をハンドルの上に、足を荷物台に、腕を横に伸してハンドルの上に載せている。」

不条理劇の翻訳というのは実にむづかしい仕事であるが、長年、実際の舞台の仕事にいらしてくださった大木氏の筆はまことに淀みがなく、すぐれた訳業といふべきである。

(近藤公一・大学経済学部教授)

『中瀬古 和作品集』

(同志社女子大学音楽学科
A4判、一六五頁、非売品)

五月十八日は、同志社女子大学で音楽理論関係の授業にユニークな指導をされていた、中瀬古和先生の五回目の命日である。

これを機に女子大学音楽学科では、現代作曲家としても活躍された先生の作品集を出版した。

中瀬古先生の創作年代は、大別して二期に分けられる。第一期は昭和八年ごろから

二十九年まで。この時期の作風には、その師であったドイツの現代作曲家P・ Hindemithの影響が強くみられる。第二期は昭和二十九年から晩年まで。この期の作品には、先生特有の鋭い感覚が、二度目のアメリカ留学中に啓発され、研究された、多機能性理論とよく結びついて発展し、高度な技法と緊張度の高い充実した内容を示す。

このように、作風からは二期に分かれるが、先生が作曲活動を通して常に追求されたことは、「日本人が生来もっている音言語を組織だてること。それは、作曲において歌詞と音楽のいかなる結びつきによって適確に表現されるか。」ということであった。この問題の解明のため、日本語、日本の伝統音楽、聖書のことば(文語訳、グレゴリオ聖歌などを深く研究され、究極的にことばと音楽の結びつきにより表現されるものの奥に内在し、創造の根源であるものとも崇高なるものへの追求へ向かわれた。それは、具体的に宗教曲の創作であった。特に最後の十年余り、「聖書が創作の根源である」という根本理念により、宗教曲が作品の主流となり、勢いが増した。

新島襄研究参考図書

My Younger Days

同志社校友会

新島襄の生涯

(J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳)

同志社校友会

新島先生書簡集―続(森中章光編)

同志社校友会

新島襄書簡集(同志社編)

―岩波文庫
岩波書店

新島襄先生(徳富蘇峰著)

同志社出版部

新島襄―人と思想(魚木忠一著)

同志社出版部

新島襄(岡本清一著)

同志社出版部

新島先生と徳富蘇峰(森中章光著)

同志社出版部

同志社九十年小史

同志社出版部

(同志社社史史料編纂所編)

同志社九十年小史

同志社九十年小史

同志社九十年小史

同志社九十年小史

同志社九十年小史

同志社九十年小史

作品集に収められたのは、第二期のものばかりで、歌曲合唱曲が十四曲、器楽曲が四曲である。そのうち十二曲が聖書をテキストとしている。

次に各作品を簡単に紹介する。

一、「主よいずこに往きたもうか」(一九六〇) 女声のためのカンタータ。使徒ペテロを主題とする四部作。歌詞の出典は、ヨハネとマタイによる福音書と使徒行伝の一部。二、「知恵書 Liber Sapientiae」(一九六一) 女声三部、ピアノ、ヴァイオリンのために。神学者故有賀鉄太郎氏の訳をテキストとした三部作。多機能性理論に基づく音の処理によるピアノの響きを伴奏に、女声三部がうたい、ヴァイオリンは断片風に、ときに間奏風に挿入される。三、「エホバよ我ふかき淵より汝をよべり」(一九六五) 女声四部、ヴァイオリン三本のために。歌詞は詩篇一二三〇。四、「頌」(一九六七) 女声四部とバリトン独唱のために。三十七小節の短かい曲中に、シメオンのたたえうたがうたわれる。出典のルカによる福音書二章二十八―三十二節は女子太学頌啓館の命名の出典でもある。五、「わ

れ黎明をよびさまさん」(一九六九) 詩篇五十七をテキストとしたこの作品は、第二期の合唱曲の分野での一頂点をなす。混声合唱とバリトン独唱とオルガンのために書かれ、三部よりなる大規模なカンタータである。六、「そは 荒野に水わきいで」(一九七〇) 混声合唱とテナー独唱とオル

ガンのために書かれた大作。五部よりなり、前作品よりもさらにとぎすまされた多機能性の技法が用いられている。出典はイザヤ書三十五章と詩篇十九篇の一部。七、「神よ 捧げまつる 感謝の歌を」 詩篇六十五八、「すべての国よ 神をたたえよ」 詩篇一二七九、「主 シオンのとらわれびとをかえしたまひしとき」 詩篇一二六―いずれも一九七一―これら三曲の詩篇歌は、文語訳の詩篇をもとにして編詩されたテキストである。これからの日本の教会のために、という意図で作られたもの。十、「視よ、冬すでに過ぎ」(一九六三) 十一、「北風よ起れ」(一九六三) これら二曲は、雅歌をテキストにして、短かくまとめられたソプラノ独唱とピアノのための歌曲。十二、「狹井河よ 雲起ちわたり」(古事記―

一九六四) 十三、「うつせみし 神に堪へねば」(万葉集巻三―一九六四) 聖書をはなれて、作曲者が興味をもった古事記、万葉集の古い日本のことばに作曲された。メツォソプラノとヴァイオリン三本のための歌曲。十四、「飛翔」―大澤忍歌集「遠翔」より―(一九六八) 作曲者の友人、医学者であり歌人の大澤忍氏より贈られた、ヨーロッパ旅行記の歌集「遠翔」より、作曲者が特に共感を得てえらばれた十首を、独唱とピアノのために作曲したもの。色彩豊かな音画集である。

次に器楽曲について。

一「... And after the fire a small voice」(九五八)

これは旧約聖書列王紀上十九章十二節をよりどころにして、ヴァイオリンとオルガンのために作曲された一つのファンタジー。オルガン序奏につづいて三部よりなり、ヴァイオリンとオルガンが対話し、ともに語る。

二、弦楽四重奏Ⅱ(一九五九―一九六二) 伝統的形式の三楽章よりなる弦楽四重奏曲。

三、弦楽六重奏（一九六六）

弦楽合奏曲中、もっとも充実した内容の作品。短かく簡潔な音素材にあらわれた楽想は、その特徴あるリズム型、旋律型また音群により極めて独創的な作品となった。

四、独奏ヴァイオリンのための楽章（一九七二）

作者の最後の作品。三楽章よりなる。長短三度の断片的音型が動くアダージョの第一楽章、ゆったりしたテンポの中に特徴的な四度の下行音を主にする第二楽章につづいて、第三楽章は前二楽章と対照的に流れのある抒情性をたたえている。各楽章の性格は異なるが、素材の内部構造には有機的な関連性がある。

作品集は、作曲者の自筆楽譜（二二八—三三五頁を除く）の写真版である。この作品集により、一人でも多くのかたがたに中瀬古作品を演奏して、その作風に親しんでいただく機会をもっていたきたいとねがうものである。ぜひ、多くの関心あるかたがたの一覧をおすすめる。

なお、作品集は非売品ですが、ご希望のかたには実費二千元、送料百円でおわけいたします。

す。同志社女子大学音楽学科事務室（〇七五—二五一—四二〇）にお申し込みください。

（篤淵即子・女子大学教授）

田中忠雄著

『田中忠雄聖書画集』

（教文館、B4判）
（一九九頁、八、五〇〇円）

田中忠雄は、行動美術協会結成以来、会員として活躍し、日本においてほとんど類例を見ない聖書画に取り組んだ、特異な画家である。ヨーロッパでもキリスト教美術の作品は、現代においては極めてまれである。極言すれば、二十世紀のキリスト教画家は、ルオー一人であると言えるかもしれない。田中忠雄の作品の中には、明らかにルオーを意識して制作したと思われるものも、かなり見いだされる。あるいは彼は、日本のルオーたることを自負しているのかもしれない。

聖画とは、キリスト教の主題を描くものである。しかし聖書から主題を得たからと言って、すべてが聖画と呼ばれるわけ

同志社時報第63号

《座談会》同志社と国際交流

平井 恒夫・北垣 宗治・中島 和子

J. M. RASCHE・佐藤 幸夫・（司会）竹中 正夫

帰国後の子女教育に対する悩みと提言……………藤田 將之

一外人教師の見た同志社……………B. D. TUCKER

〈同志社人物誌〉（41）高橋元一郎……………武 邦保

随想・新刊紹介・その他

1部 150円・年3回発行

はない。日本の寺院や古い仏像を描いたものが、直ちに宗教画や仏画を意味しないのと同様である。田中忠雄の聖書画集をここに取り上げるのは、ただ単にそれが聖書の物語を主題にしているという理由からではない。むしろキリスト教的な精神を表現している絵画として評価されるからである。

もちろん、画題と表現された精神内容とが切り離されて在るわけではない。真の芸術作品にあっては、両者の分裂などは考えられないであろう。田中忠雄は、キリスト教的な信仰を絵画の世界で実践した画家である。聖書画の中に、キリスト教的な精神を生きている者と言うべきであろうか。

田中忠雄が聖書画を描きはじめたのは、敗戦後の荒廃した日本の社会状況の中にあつて、救済を願う宗教的、現実的な関心が直接の動機となったようである。厳しく現実を見つめる画家の眼が、深い信仰に支えられて発芽したのが、彼の聖書画であつた。教会堂のステインド・グラスの制作も試みた。同志社大学の新しい神学館の礼拝堂のそれも、彼の手に成るものである。彼の父は田中兎毛と言ひ、明治十年代に同志

社に学び、後、札幌組合教会の牧師として開拓伝道にあたつた。彼の信仰心は、このような家庭環境の中に培われたものであつた。田中忠雄の生涯については、本書のはじめに、神学部の中正夫教授がかなり詳しく紹介されている。画家の向井潤吉や美術批評家の今泉篤男も序論的に彼の聖書画について語っている。ことに今泉氏は若い時代からの友人として、現代の中に生きるキリスト教画家、田中忠雄の芸術に対して、愛情のこもった言葉を寄せられている。

この画集は、作品の制作年代にこだわらず、聖書の物語の年代順に編集してある。色刷図版も良くできている。画集に納められたものは、彼の聖書画のごく一部のものにすぎないであろうが、彼の特異な画風をじゅうぶんにかがうことができる。

最近の氏は、日本におけるキリスト教美術の推進者として活躍されていると聞く。暗く揺れ動く現代の社会に一条の光明を見いだすべく努力される田中忠雄の姿に、敬意を表したいと思う。

(金田民夫・大学文学部教授)



『回顧七十七年』（大塚節治著）

B 6判 六、〇〇〇円

大塚節治先生回顧録刊行会発行

（取扱・同朋舎、校友会）

『続・同志社歳時記』

（生島吉造・松井全共編）

B 6判 七〇〇円

同志社大学出版部発行

（取扱・同志社収益事業課）

『同志社校友会名簿—昭和五十二年度版』

（同志社校友会編）

B 5判 一〇、〇〇〇円

同志社校友会発行

（取扱・校友会本部、各支部）